

せんぐう館 平成 26 年度企画展示

み ち
伊勢への信仰 一次の 20 年へ
展示の手引き



開催期間 平成 26 年 12/25 [木] から

平成 27 年 3/23 [月] まで

場 所 せんぐう館 (伊勢神宮外宮)

企画展示によせて

古来、伊勢参宮は貴族から庶民にまでおよび、江戸時代にはその^{りゅうせい}隆盛を極めました。

平成 25 年には式年遷宮もあって、明治 28 年からの統計以来、過去最高となる 1,420 万人の参拝者をお迎えしました。

伊勢へ伊勢へとつづく信仰の道は、今も変わることなく神と人とをむすびつづけています。

次期式年遷宮は 20 年後となりますが、その営みは、日々の^{さいし}祭祀の繰返しと日本国民の広く篤い^{あつ すうけいしん}崇敬心により支えられております。

本企画において、「伊勢信仰と旅」をテーマに参宮の始まりから現在に至るまで、今も昔も変わらない神宮への崇敬と日本人の心を知り、明るい日本の将来を見据える機会となれば幸いです。

平成 26 年 12 月 25 日

式年遷宮記念せんぐう館

目 次

企画展示によせて	頁
一、 参宮のはじまり	4
二、『伊勢両宮曼荼羅』	5
三、『伊勢参宮名所図会』を辿る	7
四、 信仰と娯楽	23
五、『参宮読本』をよむ	27
六、 おわりに一次の 20 年へ	31

凡 例

- ・この冊子は平成 26 年 12 月 25 日から平成 27 年 3 月 23 日にかけて式年遷宮記念せんぐう館において開催する企画展示「伊勢への信仰一次の 20 年へ」に際して作成したものです。
- ・図録の資料図版の順は、展示順序を示すものではありません。
- ・参宮道者については、参宮者に統一して表記しています。
- ・街道名は参宮街道に統一しました。
- ・本誌掲載の写真、地図および記事の複製・無断転載等は固く禁じます。

一、参宮のはじまり

■「参宮人十万人、貴賤を論ぜず」『太神宮諸雜事記』

承平4 年（9 3 4 ）9 月神嘗祭

■「遠近万邦の参宮人、幾千万を知らず」『勘仲記』

弘安1 0 年（1 2 8 7 ）第 32 回外宮式年遷宮

伊勢参宮の様子を記した古い記録をたどると、神嘗祭や式年遷宮を契機として、平安中期以降にはすでに多くの参宮者があり、時代が降るにつれてその数は増えていったことをうかがわせます。

い せ りょうぐう まん だ ら
二、『伊勢両宮曼荼羅』



作者 不詳 室町時代 縦 167cm 横 180cm (神宮徴古館蔵)

室町時代に描かれたとされる、この図は、^{えんかく}遠隔の崇敬者に対して伊勢^{い せ しんこう}信仰を広めるため、全国各地に出向いていった御師や^{おんし}勧進^{かんじんひじり}聖、^{しゅげんじゃ}修験者らが^{え と}絵解きに使用したとされています。全体の構図を見ると、画面右側に外宮、左側に内宮を配しています。大きくデフォルメされた構図は、外宮、内宮それぞれ3段階に分けることができます。画面の下から、①門前町→②神域→③^{れいげん}霊験の山

参宮ルートは右下からスタートしますが、宮川の様子と外宮に至るまでの門前町（鳥居前町）の習俗が描かれています。外宮で一旦、高倉山^{たかくらやま}まで登り、間の山^{あい}、古市^{ふるいち}を通って、内宮に向かいます。内宮の後は金剛證寺^{こんごうしょうじ}、二見の立石^{たていし}（夫婦岩^{めおといわ}）が描かれ、遠くには富士山を望みます。

また、画面の右下宮川付近から、同じ描写の修験者や参宮者が巧みに配置され、その像を辿ってゆくと外宮から内宮までの参宮が完結する仕組みになっています。絵解きにより遠隔の崇敬者があたかも実際に参拝した気分にもなり、伊勢信仰を広める媒体となっていたと考えられます。



修験者^{しゅげんしゃ}



茶屋



参宮者



水垢離^{みずごり}（禊^{みそぎ}）



祓女^{はらえめ}



参拝



御贄^{みにえ}を担ぐ神戸^{かんべ}

い せ さんぐうめいしよ ず え 三、『伊勢参宮名所図会』を辿る

『伊勢参宮名所図会』は、寛政9年（1797）に刊行された5巻6冊、付録1巻2冊絵入り大判本です。内容は京都三条大橋から近江（滋賀）をぬけ鈴鹿峠を越えて伊勢神宮に至るまで、道中の名所や宿場の様子、由緒風俗について詳細に解説しています。また、この書物には天皇の皇女が齋王^{さいおう}として京より伊勢に赴任する道筋を伊勢参宮の起源に据えるという認識がありました。それにより、京都からの参宮者は古来の齋王群行^{さいおうぐんこう}や、神宮の祭典に際し遣^{つかわ}される勅使参向^{ちよくしさんこう}の道筋を辿ることで、伊勢への祈りの旅が始まります。



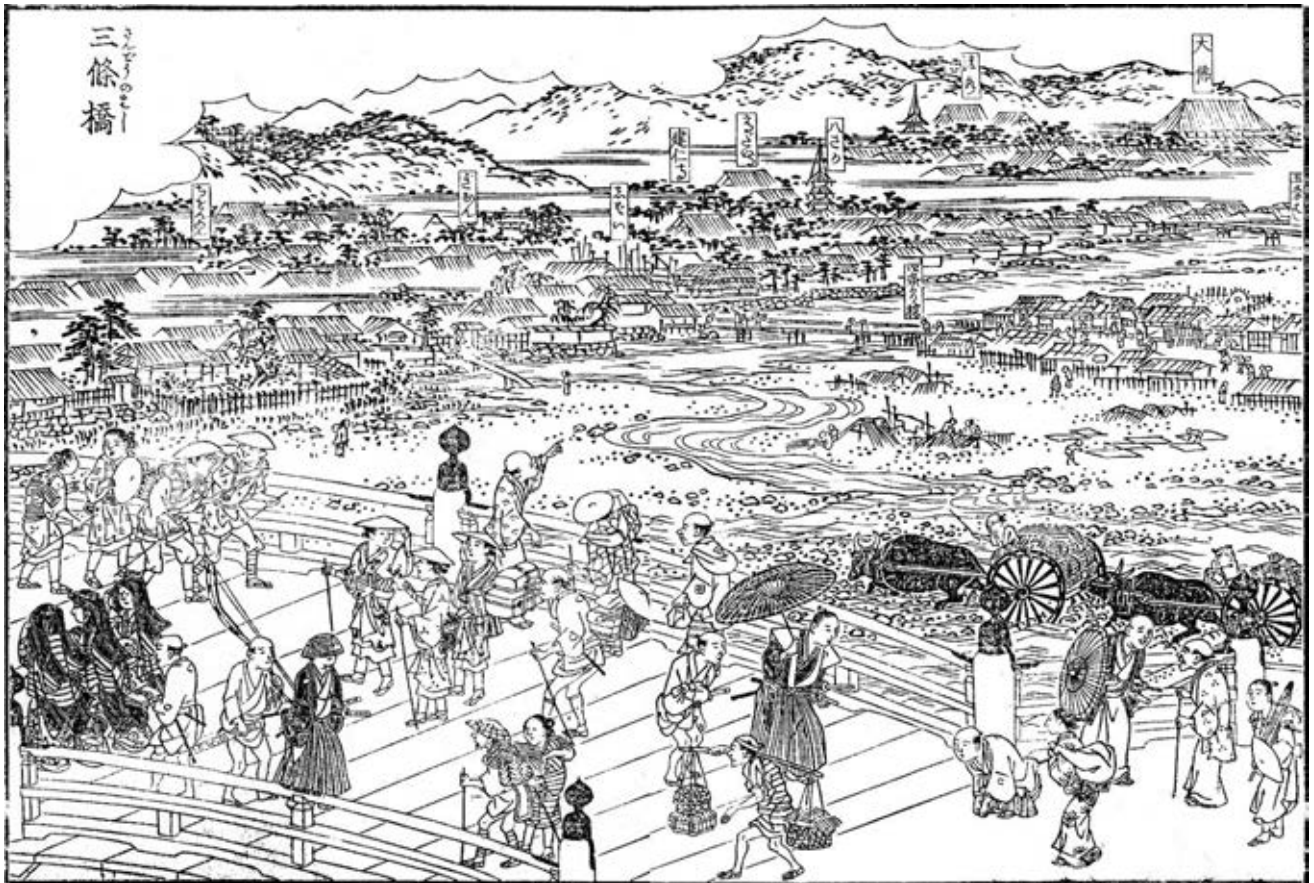
齋王群行

さいおう 齋王とは

齋王は「いつきのひめみこ」とも読み、天皇の皇女もしくは未婚の女王が天皇の即位の度に卜定で選ばれ伊勢国に赴任しました。齋王は天皇に代わり神宮において祭祀を行う職で、神宮の三節祭（6 月月次祭・神嘗祭・12 月月次祭）において、年三回のご奉仕をしました。平素は、神宮より 20 km ほど離れた多気郡（多気郡明和町）にある齋宮で齋戒生活を送られました。齋王制度は鎌倉時代末期、後醍醐天皇の御代、第 74 代祥子内親王を最後に廃絶し復興をみることはありませんでした。



『伊勢参宮名所図会』伊勢物語挿絵



さんじょうのはし

三 条 橋 (京都市：三条大橋)

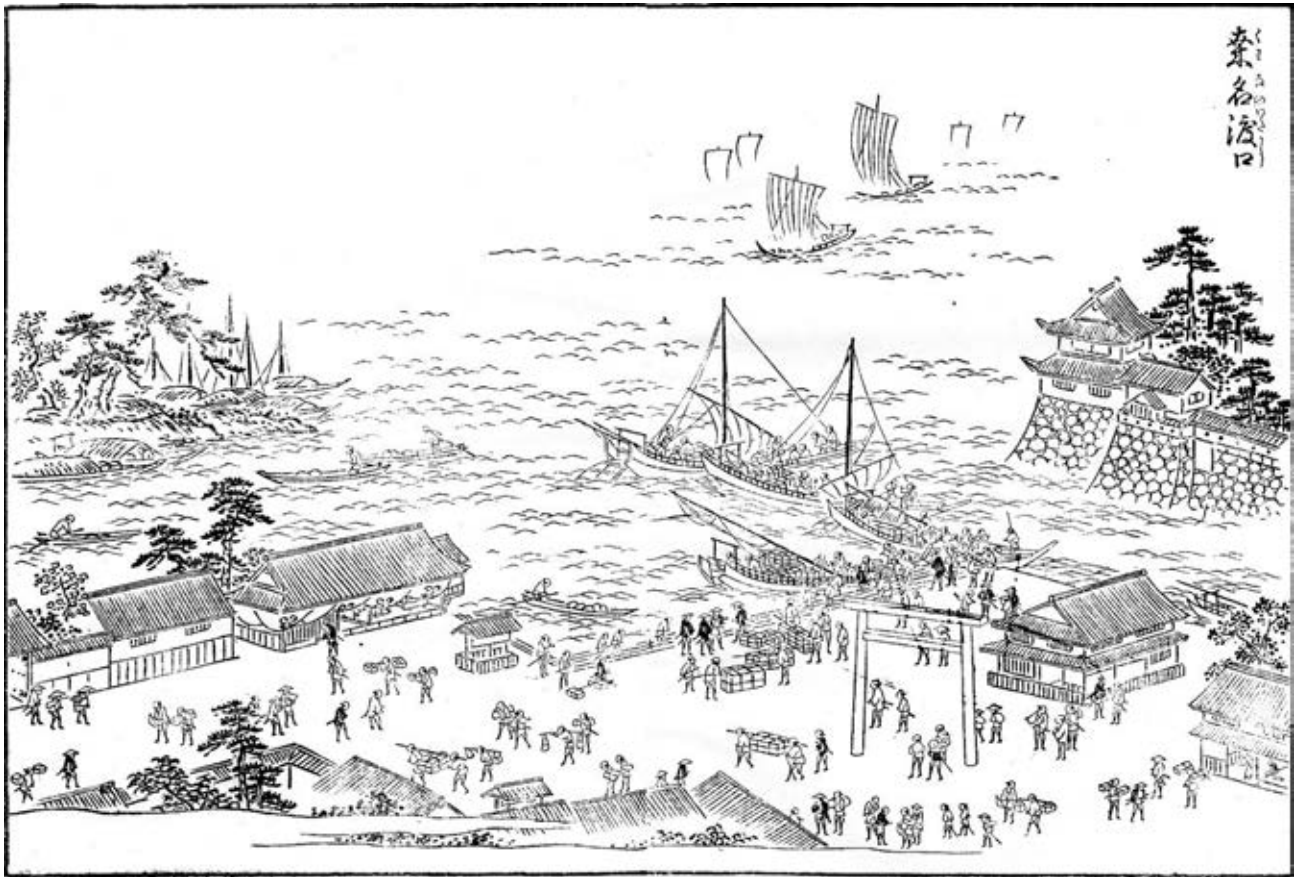
京都三条大橋は、江戸日本橋からはじまる東海道五十三次の終着点です。

『伊勢参宮名所図会』では伊勢参宮の出発点として描かれています。旅人や町人で賑わう橋の様子が詳細に描かれ、遠方には大仏（方広寺）清水八坂の塔など京の名勝が見られます。画面左方向が伊勢をめざし近江に抜ける東海道です。橋中央には三人で旅をする女性の姿も見え、後ろには一行の荷物を担ぐ男性の姿があります。当時、女性の旅は道中の身の危険もあり、必ず男性を同伴するのが習いでした。



せき おいわけ
関の追分 (三重県亀山市：関宿)

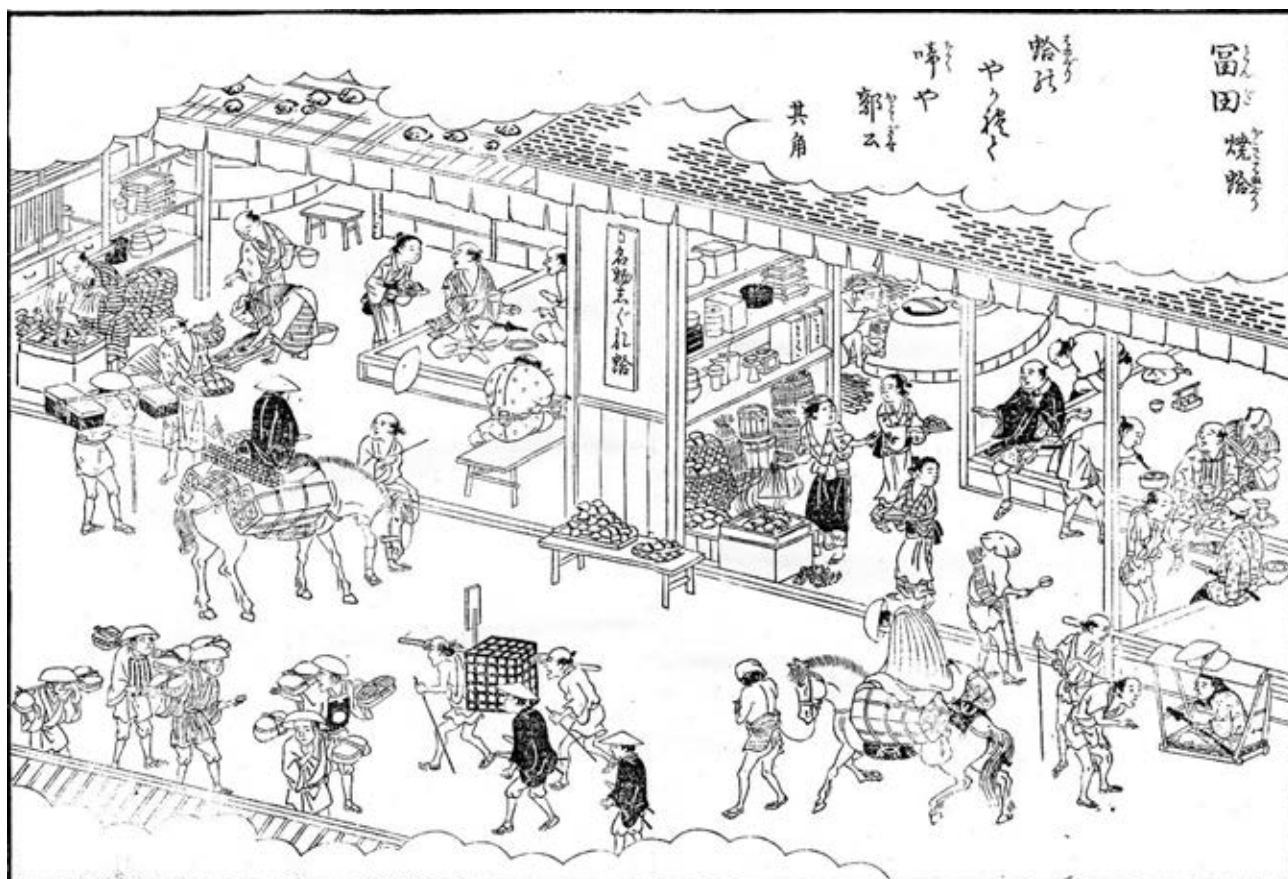
関は、東海道 47 番目の宿場で、交通の要衝^{ようしゅう}として発展しました。宿場の全長は 1.8 km あり、西の追分から大和街道、東の追分から参宮街道に分かれていました。場面は参勤交代で領地に帰る大名行列の様子が描いています。宿場には大名の宿場である本陣^{ほんじん}やお出迎えをする御馳走場^{ごちそうば}がありました。また、神宮へ向かう参宮街道の入り口には鳥居が立っており、諸国から来た参宮者はいよいよ参宮街道に入っていきます。現在は式年遷宮が終わると、取り壊された御正殿^{むなもちしら}の棟持柱が宇治橋鳥居（渡った内側）になりますが、宇治橋鳥居のあとはこの関の鳥居として使われています。



くわなのわたし

桑名渡口（三重県桑名市）

桑名は東海道 42 番目の宿場で、関東方面からきた参宮者は、尾張の宮から桑名まで船で渡りました。この渡しは「七里^{しちり}の渡し」と呼ばれ、船での所要時間は 4 時間ほどで、常時 70 隻もの船が行き来していました。松平氏の城下で、海に面して桑名城が描かれています。船着き場（御船場）におりるとすぐに鳥居があります。伊勢国の海からの玄関口として多くの参宮者がこの鳥居をくぐり伊勢路に入ります。現在は関の追分の鳥居と同様、外宮棟持柱が宇治橋鳥居（外側）で使用の後、ここ桑名の鳥居として使われています。



とみだ
富田 (三重県四日市市)

富田は桑名宿^{よっかいちしゆく}と四日市宿^{たてば}の間に位置し、立場^{たてば}の機能を果たしました。立場とは、江戸時代、街道筋で駕籠^{かご}かきや人足^{にんそく}（荷物を運ぶ人）の休憩所のことです。立場には茶屋が立ち並び、とくに富田立場は「焼き蛤^{はまぐり}」で有名でした。画面中央には「名物しぐれ蛤」の看板が見え、江戸時代には諸国からきた参宮者の楽しみになっていました。富田の焼き蛤の事を桑名藩領であった事から富田ではなくて「桑名の焼き蛤」と言うようになり、現在でも有名ですが、焼き蛤料理そのものは富田地区に残っていません。



いなざわ
稲置川（三重県多気郡明和町：祓川）

稲置川は竹川（^{たけ}多気川）または^{はらえがわ}祓川ともいい、神宮神領の「^{きんきょう}近境」として中世までは^{さいおうぐんこう}斎王群行や^{ちやくし}勅使（天皇の使者）、^{れいへいしさんこう}神嘗祭例幣使参向の際、^{だいじんぐうじ}大神宮司の^{うらべ}卜部がここで祓の儀式を行っていました。川には板橋が掛けられていますが、中央は船を浮かべた舟橋となっています。上流の^{はしくい}橋杭は古来勅使一行が渡った^{さいはいばし}再拝橋（^{さいわいばし}幸橋）の跡で名所となっていました。川を渡る馬は背中に^{さんぼうこうじん}三宝荒神の鞍をつけており、橋を渡る女性二人と従者、右側から走り来る^{ひきやく}飛脚、対岸で^{わらじ}草鞋を売る子供など、道中の様子が細かく描かれています。

※三宝荒神とは馬の鞍の両脇に杵を付け、三人乗りにしたもので、道中で参宮者を運ぶ馬稼ぎのこと。



みょうじょう

明星 (三重県多気郡明和町明星)

明星は齋宮のあった齋宮村^{さいくむら}から宮川渡しの小俣^{おぼた}に至る途中にありました。街道筋には多くの旅籠・茶屋^{はたご}が建ち並び、厚化粧をして参宮者を自分の店に引き寄せる茶屋女が有名で、「明星茶屋^{みょうじょうちや}」と称されて賑わっていました。絵の中にはそれぞれに足を休めながら茶を飲む参宮者の様子が描かれています。その他、店先では、旅中に使う擬革紙^{ぎかくし}の煙草入れ^{たばこ}と菅傘^{すがかさ}が並べられ有名な土産物となりました。神宮に向かって細長く続く軒を連ねた町並みは、現在も当時の面影を残しています。

明星の茶屋のをなごによいもあり 又首すらにあかつきもあり



みやがわひがしきし

宮川東岸（三重県伊勢市宮川町）

参宮街道を歩いてきた参宮者は宮川を一旦船に乗って渡り、外宮の鳥居前町^{とりいまえまち}山田^{やまだ}に入ります。水量の多い宮川には橋が無く、参宮者を巻き込んだ洪水の記録も多くみられますが、明治時代になってようやく架橋されました。江戸時代の川柳には「お伊勢さんほど大社はないが なぜに宮川橋がない」とうたわれています。この渡し船は「神宮様の御馳走船^{ごちそうせん}」といって、船賃は無料でした。また古くは斎王や勅使^{かわらばらい}が川原祓をするのが習わしとなっており、一般の参宮者もここで禊をするのが慣例となっていました。図は山田側に上陸した参宮者を御師の手代が出迎える様子や参宮を終えた一行が乗船する姿、田楽を売る茶屋等、船着き場の賑わいが描かれています。



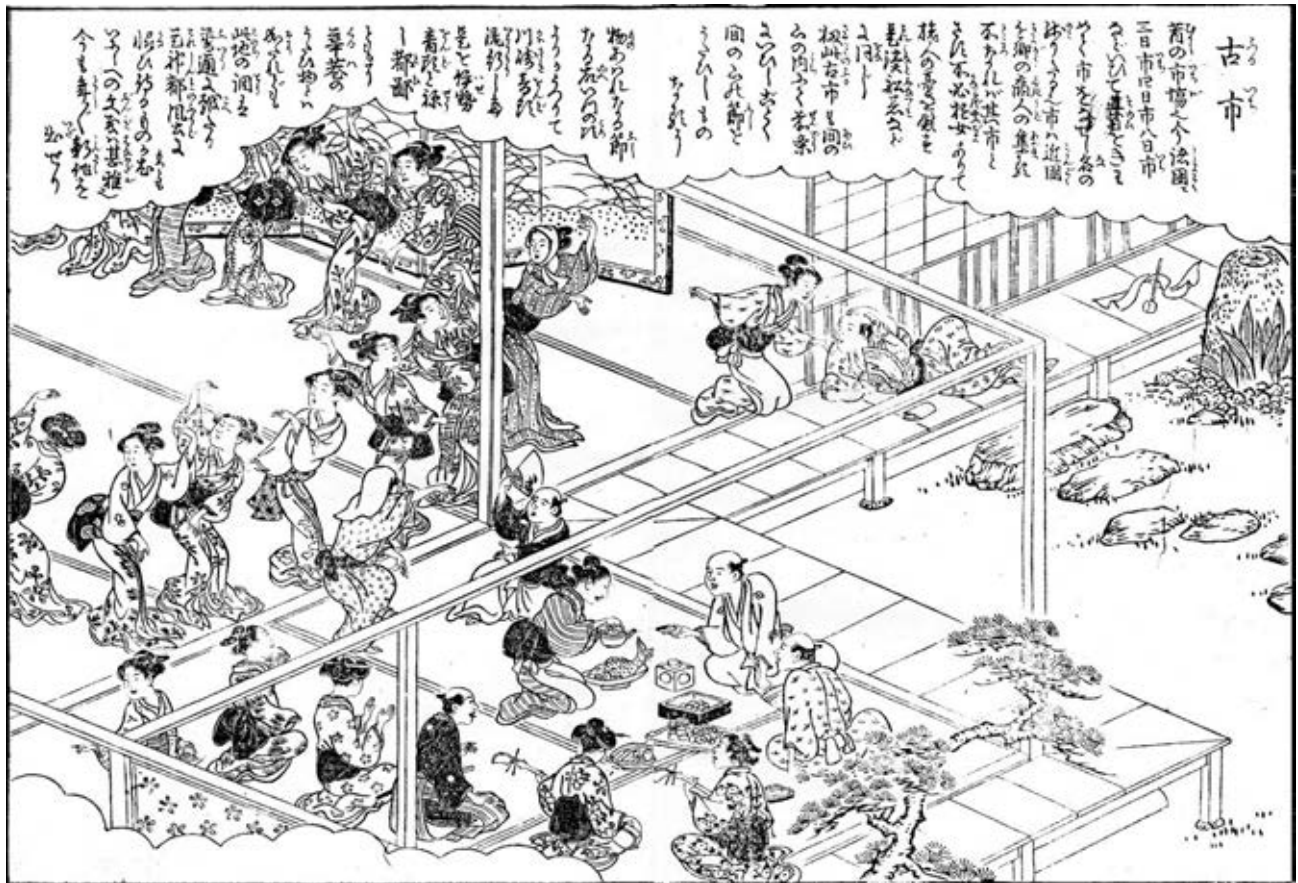
なかがわら
中川原（三重県伊勢市宮川町）

山田の町の玄関口として、御師の手代が参宮者を出迎える場所となっていました。
 た。片旅籠茶屋と呼ばれる施設では、御師や講の名、組頭の姓名が書かれた
 抬牌（看板）が立てられており、参宮者の目印となっていました。その他、片
 旅籠茶屋は宿に困った参宮者の宿泊や御師を斡旋する仲介業など、現在でい
 う旅行案内所のような機能を持っていました。遙々諸国から無事到着して、御
 師と合流した参宮者は、ここからは御師の案内により安心して両宮の参拝へ向
 かうことになりました。



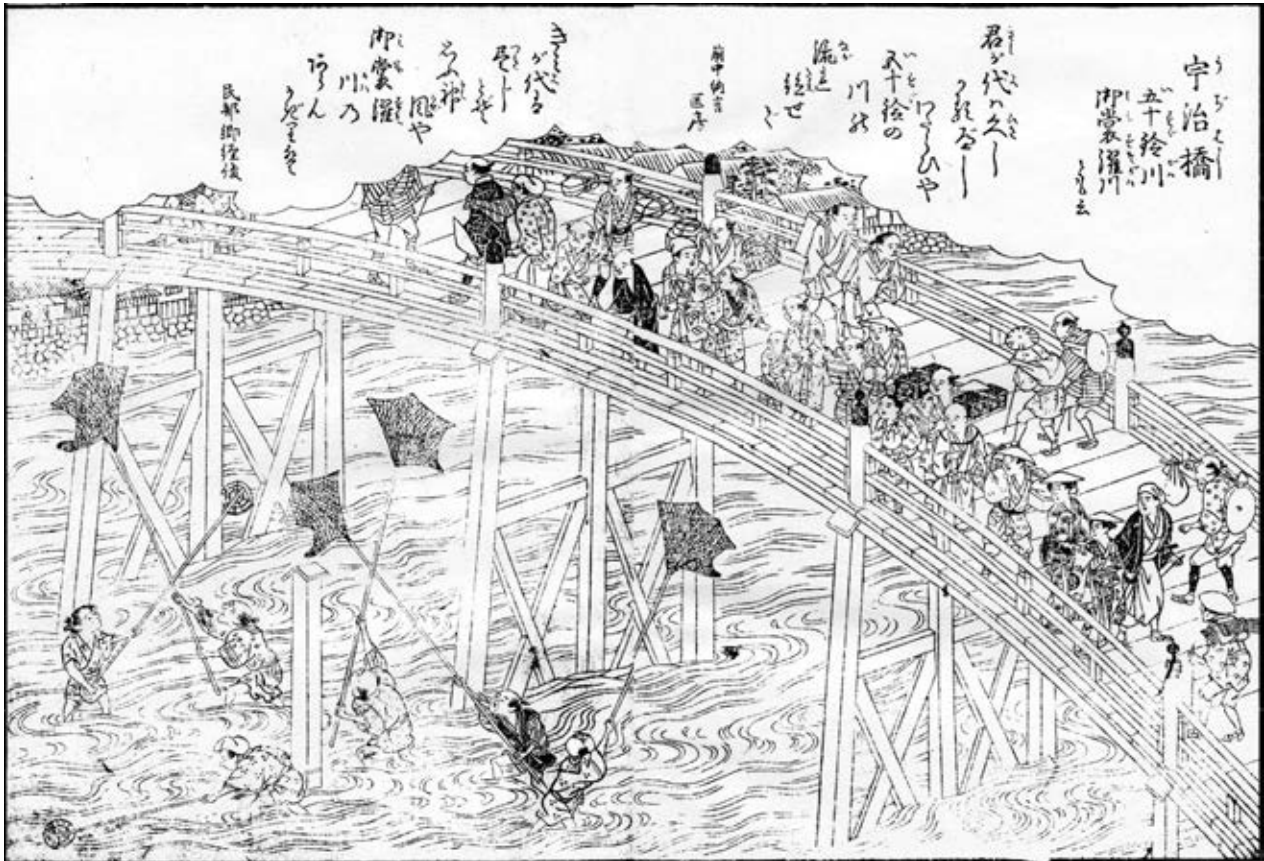
おんべがわ おだ
御贄川と小田の橋 (伊勢市岡本町：勢田川と小田橋)

外宮参拝を終えた参宮者は、岡本町から間の山^{あい やま}を抜け内宮へ向かう途中、御贄川^{おんべ がわ}（現：勢田川^{せ た}）に架かる小田橋^{おだのはし}を渡ります。御贄とは神宮に献上する魚を捕っていたことに由来します。図を見ると、下流側にもう一つ橋が設けられています。これは仮屋橋^{かりやばし}と呼ばれ、神領では禁忌^{きんき}が厳格なため触穢^{しょくえ}（家族に不幸があった）および月水の女性が通るためのものでした。仮屋とは古来、女性が月経や出産のときにこもった別屋^{べつや}のことをいいます。神宮の祭典に際しては、斎王や勅使が小田橋を渡ることから、別の橋が脇に架けられていました。仮屋橋には二人連れの女性と髪剃っている男性が見られますが、どちらも地元の人と見受けられます。



ふるいち
古市（伊勢市古市町）

小田橋を渡り丘陵の坂を登っていくと、古市に入っていきます。古市は外宮と内宮の中間に位置し、江戸時代には参宮街道中、最大の歓楽街として発達しました。間の山^{あい やま}と呼ばれるせまい道中の両脇には旅籠^{はたご}や茶屋、芝居小屋が延々と軒を連ね、70軒を数える妓楼^{ぎろう}が参宮者の遊興を誘いました。図は妓楼で伊勢音頭を見ながら酒を酌み交わす男性の客が描かれており、遊郭での豪奢な遊び^{ごうしゃ}の様子が伺えます。また、古市は伊勢歌舞伎をはじめとする芸能文化発信の拠点として全国的にも有名でした。



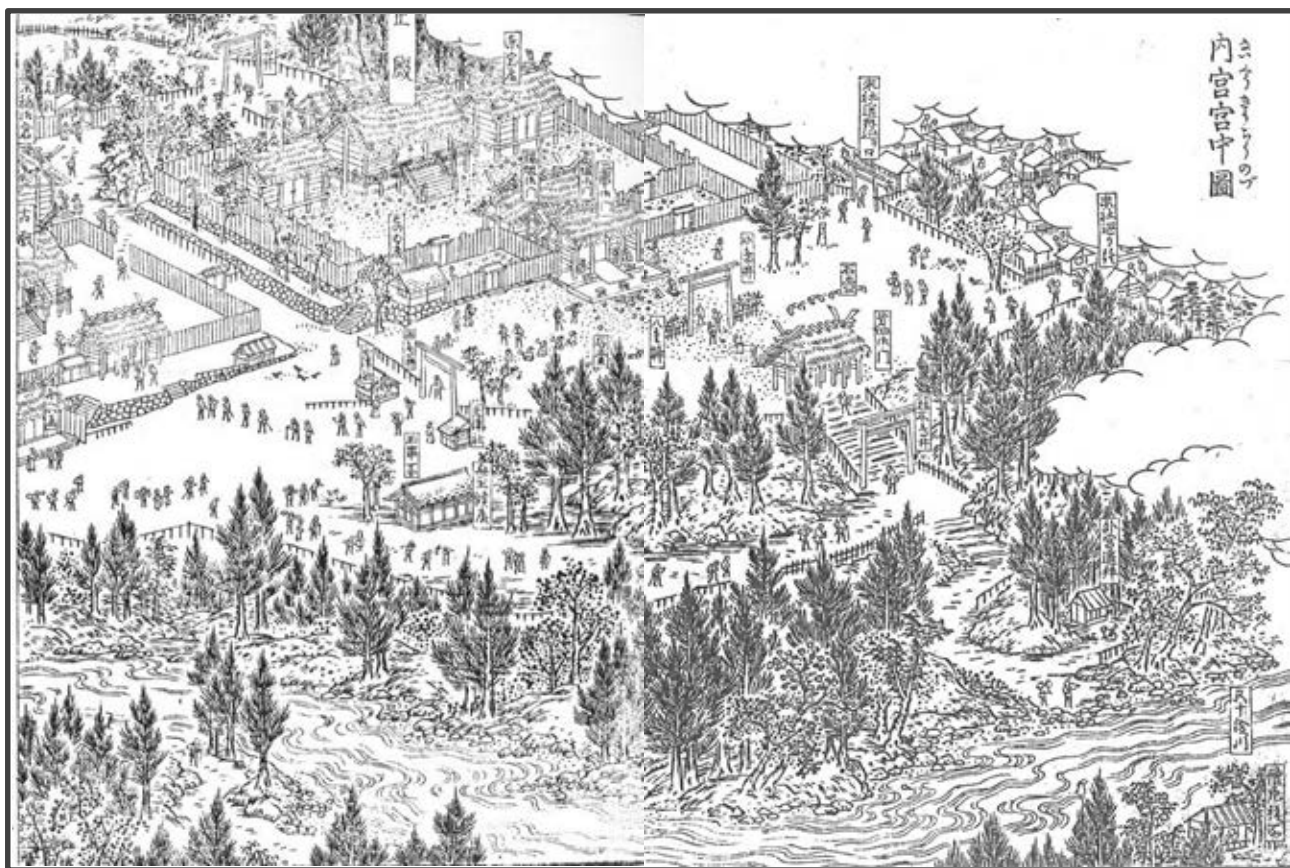
うじばし 宇治橋

宇治橋は内宮の五十鈴川（^{みもすそがわ}御裳濯川）に架かる橋で、宇治とは内宮の鳥居前町の郷名です。現在の規模の大橋になったのは室町時代で、明治時代までは橋を渡った神域側にも神職の館をはじめとする宿舎が立ち並んでいました。

^{はるばる}遙々諸国から徒歩で来た参宮者は、道中、国ごとにいくつもの川を越えてきました。神路山を遙かに仰ぎ五十鈴川の清流を見ながら、いよいよ神域に入っていきます。

君が代は 久しかるべしわたらひや 五十鈴の川の流れ絶えせず 前中納言 匡房
(『新古今和歌集』)

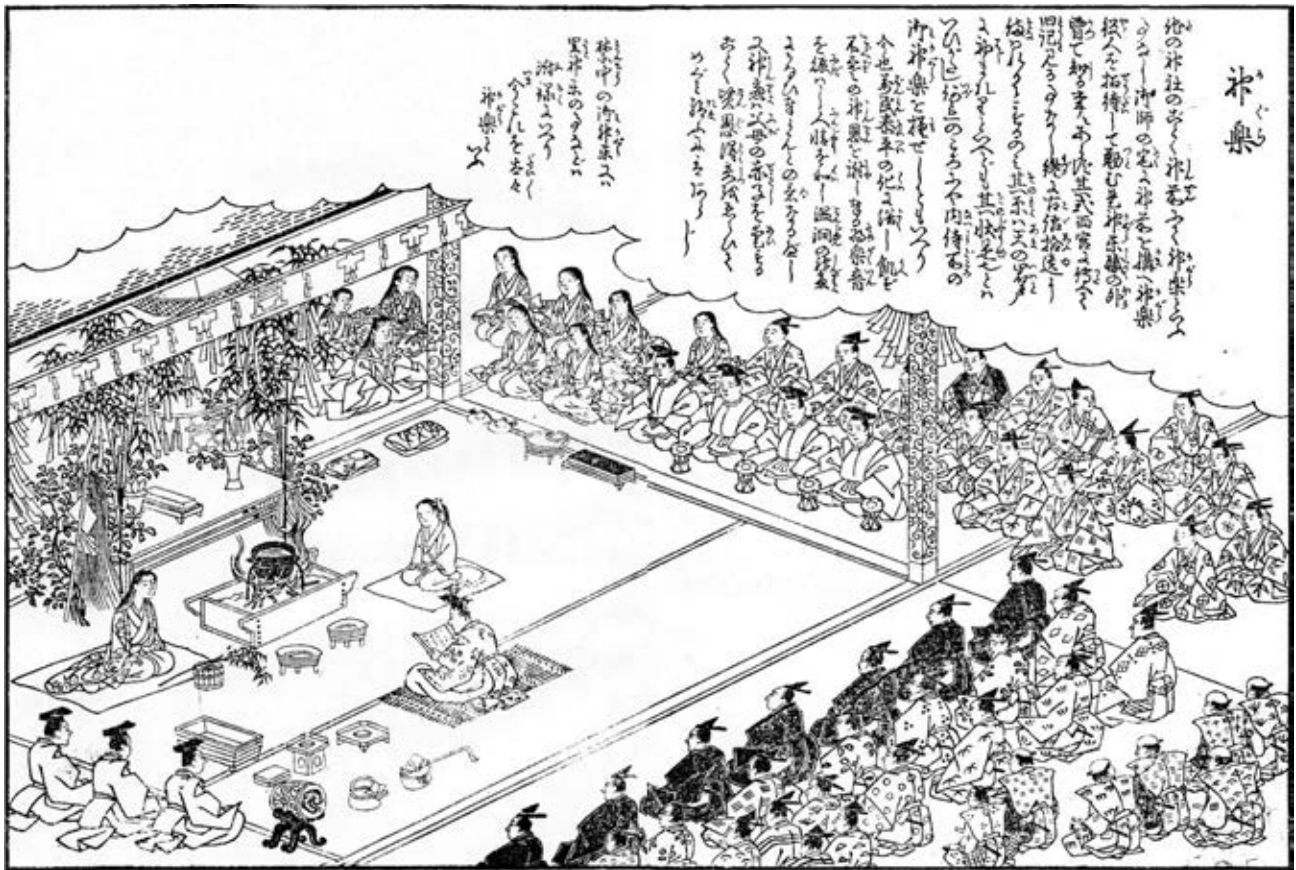
きみが代は 尽じとぞ思ふ神風や 御裳濯川のあらんかぎりは 民部卿 経信
^{澄まん}
(『後拾遺和歌集』)



ないくきゅうちゅうのず
内宮宮中之図

構図から正殿がある東の御敷地を中心に描いています。外宮と同様、外玉垣、板垣がなく（明治期に復興）、東側には 80 の末社群がありました。正殿の両脇に東宝殿・西宝殿が描かれています。この配置は天正 13 年（1585）第 41 回式年遷宮以来のもので、明治 42 年（1909）第 57 回式年遷宮において正殿後方に戻され現在に至っています。五十鈴川を隔てた対岸には僧尼拝所がありました。

何ごとの おはしますかは知らねども かたじけなさに涙こぼるる 西行
何事の をば の (『異本山家集』)



かぐら
神楽 (宇治・山田：御師邸宅)

伊勢参宮は村々で伊勢講^{いせこう}を結成し旅費^{きと}と祈祷代金^{とう}を出し合って講の代表が数人で参宮しました。そのお金で、両宮の参拝をはじめ御師の邸宅で神楽を奉納し、村と家の安泰を願って神札を受けました。講で積み立てた費用の約半分はこの神楽料や御師邸での食事、宿泊費として出費します。この神楽料によって曲目や楽人、舞人の数も決まります。神楽は釜でお湯を煮立たせて神楽を行う、湯立神楽^{ゆだてかぐら}形式で、神座^{しんざ}の前に据えてある四角形のものは御祓^{おはら}いの御印^{みしるし}となるお札^{ふだ}です。御神楽が終わると、参宮者は御師のもてなしにより贅^{ぜい}を尽くした食繕^{しょくぜん}を饗^{きよう}され、日頃味わう事ができないハレの体験をしました。

四、信仰と娯楽

伊勢参宮が盛況を迎えると同時に、宇治と山田の鳥居前町（門前町）には数々の遊興を供する娯楽施設も発達しました。参宮者の伊勢での行程は外宮・内宮参拝、御師邸での御神楽奉納、朝熊嶽参り、二見ヶ浦参詣、夜は古市での遊興等、二日から三日を要しました。



『伊勢御神楽之図』（神宮徴古館蔵）

宇治・山田に到着した参宮者は御師の案内により、まず外宮と内宮を参拝し、御師の邸宅で宿泊し御神楽を奉納しました。御師とは御祝詞師がつづまった名で、古くは神宮の権禰宜が公家をはじめ武家の私的な祈祷を取り次いでいました。江戸時代、御師の利権そのものが売買されるようになると、分家して御師の数は急増し、最盛期には宇治と山田をあわせて約800軒を数え、広く参宮者を受け入れていました。

御師の役割は御神樂^{そうこう}奏行、外宮・内宮の参宮案内、宿泊業務にまでおよびました。また、一方では年毎にご祈祷^{きとう}をしたお札や暦^{ふだ こよみ}を諸国の檀家^{だんか}に頒布^{はんぷ}することで、全国に伊勢信仰を広める担い手となっていました。御師の活躍により伊勢信仰が流布^{るふ}し、江戸時代後期には、全国の約9割の家庭で御祓^{おはらい}大麻^{たいま}が祀られていたと伝えられています。

御師邸に宿泊した参拝者は贅^{ぜい}のかぎりをつくした食膳^{しょくぜん}のふるまいと^{．．．．．}もてなしぶりに感激し、御祓大麻^{おはらいたいま}（お札）を伊勢参宮の印として土産話とともに諸国に持ち帰りました。

「伊勢へ行きたい 伊勢路が見たい せめて一生に一度でも」

伊勢音頭にも歌われるように、こういった参宮のかたちが諸国に広まり庶民の旅への欲求をかき立てました。明治になって近代化により街道も整備され鉄道が敷かれて参宮もしやすくなりました。御師の制度は明治4年(1871)に廃止されましたが、御師によって全国に頒布されていたお札は、明治天皇の思し召しにより神宮大麻^{じんぐうたいま}として、神宮から全国に直接頒布されるようになり現在に至っています。



玉蘭齋貞秀 画『備前屋伊勢音頭之図』（神宮徴古館蔵）



一勇齋国芳 画『伊勢音頭』（神宮徴古館蔵）

無事外宮・内宮の参拝を済ませた参宮者は様々な遊興・娯楽を楽しみました。

中でも古市は神都最大の歓楽街として発展し、江戸の吉原・京都の島原とならび称されるほど多くの遊郭が軒を連ねていました。そこで上演される伊勢音頭は男性のぎろう妓楼遊びというニーズに併せつつ、最先端の設備とサービス精神を旺盛にして、斬新なデザインの着物で着飾った舞妓を踊らせることで、時代の

流行やファッションに敏感な女性の参宮者をも取り込んで、伊勢参宮の楽しみの一つとなっていました。

諸国から来た参宮者はこういった聖なる信仰の裏側にある俗なる娯楽を享受しながら伊勢をあとにし、京都や奈良、大阪をめくり帰路につきました。

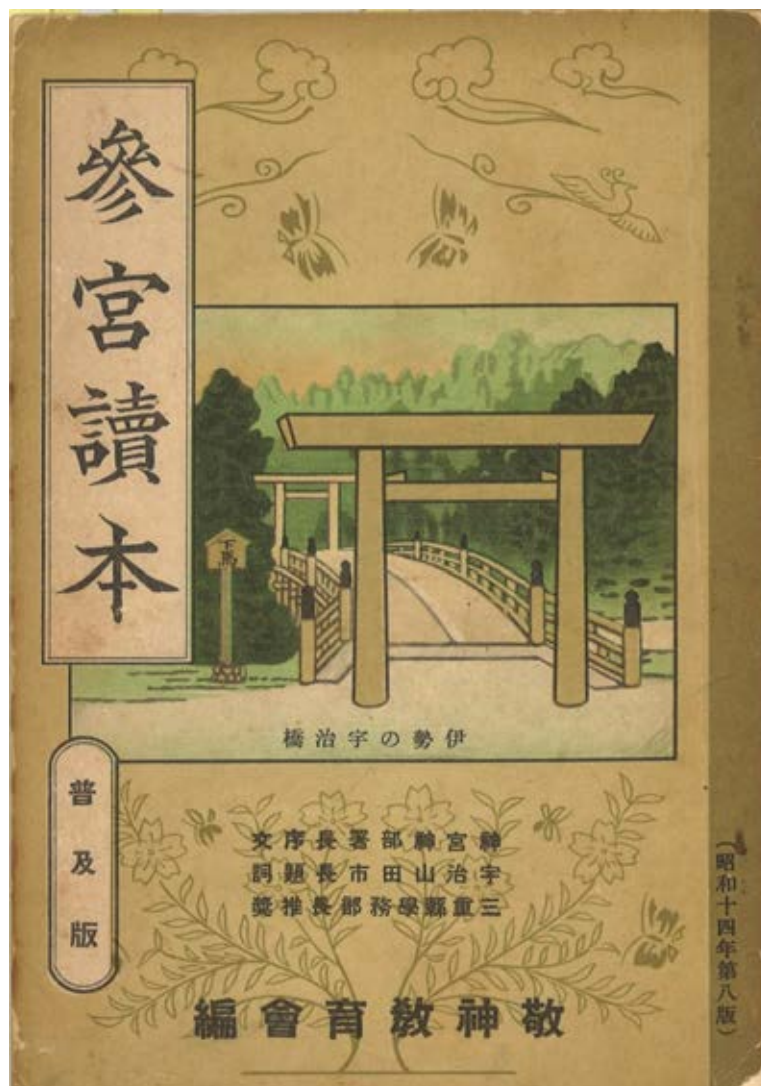
このように、伊勢参宮は信仰と娯楽が表裏一体となりながら江戸時代の庶民にとっては一生のあこがれとなり、全国的な信仰の旅となっていました。今も昔も変わらない日本人の心と旅の文化を見ることができます。



『杉本屋 伊勢音頭』（神宮徴古館蔵）

五、^{さんぐうどくほん}『参宮読本』をよむ

『参宮読本』は昭和 11 年（1936）に、敬神教育会が編纂した児童向け参宮ガイドブックです。書中では、伊勢の山水の美、風光の秀を愛でながら、神宮参拝の感慨を情感豊かに解説しています。またその随所には、日本の国体はもとより、御神徳発揚の言葉が散りばめられており、国の繁栄を願う日本人の心の^あ在り方が説かれています。（以下、文章を抜粋して紹介します。但し、漢字と仮名遣いを改めました。）



○五十鈴川手洗場

^{みもすそ}御裳濯川という名前で、昔から伊勢の名勝と聞こえています。静かにその
岸辺なる「手洗場」に立って澄み透った流れに口をすすぐと、^{しんき}神気が全身にみな
ぎります。

明治天皇御製

昔よりながれたえせぬ五十鈴川 ^{よろず よ}なほ萬代もすまむと思ふ

○皇大神宮（内宮）

つつしんで^{えり}襟を正し、清く明き心を以て ^{うやうや}恭しく^{おおみまえ}大御前にぬかずく時、この時ほ
ど真に生を日本にうけたる身の誇りと幸福とをおもう時はありません。「何事の
おはしますかは知らねども、^{かたじ}辱けなさに^{なみだ}涙こぼるる」の感慨、「おはします辱な
さを何事も知りてはいとど涙こぼるる」の至情、ヒタヒタと胸にせまって、ただ
^{しんげんすうこう}神厳崇高の氣に打たるること申すより外に ^{ことば}詞もなく、ひとえに^{しんゆう}神佑を祈り神恩を
謝したてまつる信念が、まごころこめたる「かしは手」となって高く千古の靈域に
こだまするのみであります。（中略）我等はここにしみじみと神の道の尊さを感じ
ると共に、進んで尚よく神宮に関する御事柄を承り、さらに皇室における、神宮
^{ごそんすう}御尊崇の御事実、ならびに、^{こくみんほうさい}古来今日に及ぶ国民奉賽のさまざまな事柄をも
承知して、^{いよいよますますけいしんそんのう}愈々益々敬神尊皇の精神を振り起こさなければなりません。

○神宮と国民

神宮は、皇室の御祖先であらせられますと共に、また我々国民の^{そうじがみさま}総氏神様とあがめ奉るべき大宮であらせられますが故に、昔より我が国民は^{ひさ}齊しくまごころを捧げて尊崇奉拝し来たのであります。祖先以来、親から子に子から孫に、伝え伝えてうけつがれて来た伊勢参宮の美風は、実にこのまごころの現れであって、^{ほうさい}奉賽、^{きがん}祈願、真にありがたい感激のこもった、熱情のあふれた『伊勢へ伊勢へ』の『ねがい』こそ、日本人でなければ絶対に味わう事の出来ない尊い『神の道』の^{せいか}精華であります。

○^{じんぐうたいま}神宮大麻（お札）

皇室の神宮を御大切にあそばすのをお手本として、神宮を崇敬申し上げる良風がこんなに行きわたったのは、明治天皇の^{かしこ}畏き^{おほしめし}思召によって大麻を神宮から頒布せしめられたのによることであります。

大麻は毎年、新年を迎える準備として新しく御取り替えすることになっています。思うに、神をお祀りする場合には最も清浄を^{とうと}尚ぶということに基づいて、もの皆新しくするのは、美しい国風であります。頒布のことをお達しになった中にも「^{はいじゅ}例年、拝受すべし」と記されているのは此の心持ちからだ信じます。

○暦

本暦と略歴の二種があり、これは最も正確な観測によって東京天文台でつくられるもので、日常国民生活の基準となるべきものを示された国家の正暦であります。

○日の丸を仰ぐ

かしこくも^{ひのかみ}日神と申し上げる天照大神の^{おおみすがた}大御姿をうつくしく仰ぐ日の丸の^{みはた}御旗こそ、建国の大精神をはっきりと現した尊い御旗であって、国を思うお
おらかな心を我が民族は、この日の丸の御旗によってきたえられてきたのであります。（中略）日の丸の御旗を仰いで恥ずかしくない国民になるために、我等は、常によい生活をしなければならない。日の丸の清く明るい御姿を拝して美しい鏡のように曇らない心をもって立派な行いをつづけて行くことは、我等日本人の神ながらの使命であります。そしてそれは世界にまで通さねばならぬ最も大切な使命であります。日出ずる国の人々は、おおらかな心をもって、この使命を果たすために、神の道をたどらねばならない。神の道を行き神の道を行う人に日の丸の旗はさわやかにひるがえるであります。

六、おわりに一次の 20 年へ

ここは心のふるさとか そぞろ^{まい}詣れば旅ごころ うたた^{わらべ}童にかへるかな

吉川英治(『神風帖』「人」)

伊勢神宮は「心のふるさと」として、いつの世も変わることなく日本人の「心のよりどころ」となっています。

神宮で繰り返される日々の^{さいし}祭祀と、時を超えて人々から寄せられる崇敬の心。

「持続可能な社会の実現」が国際的に叫ばれる昨今。社会は日々変化していきますが、神宮の営みは陛下の思し召しのもと、常に国の将来と繁栄を祈りながらこれからも変わらず続けられていきます。^{ゆうきゆう}悠久の歴史において、神宮が伝えてきた^{えいち}叡智は今を生きる私たちにとって、これからの未来を見据える「新しい叡智」となり、次の世代へ「心の継承」がなされていきます。

伊勢神宮に参拝することで、日本人としての誇り、将来への安心と希望を感じていただければ幸いです。